

春燈

昭和二十一年七月二十二日第三種郵便物認可

平成廿七年六月二十五日發行（舊曆六月一日）日發行 第六十卷 第六六號

6 月号

櫻桃子の句

シャーロットクホームズ横丁マンントの女消ゆ

句集『素心』昭和五十六年

この句には、〈黒マンントの女〉という「黒」の入った原案があつたようであり、わたしは、原案の方がより好きである。というのも、「黒」と明示した方が、冬の霧の街、くすんだ古都ロンドンにより似つかわしいように思われるからであり、また、かつて、わたしは、ハイドパークで、犬を連れた黒マンントの中年女性に出会い、ロンドンの女性を強く印象づけられたからでもある。

勝原文夫

櫻桃子の句

黒もじに切先ありし利休の忌

『春燈』平成四年

十代で入った茶の道。黒もじは懐紙につつまれいつも共にある。茶事は刀のない真剣勝負と教えられた。主客は互いに気力・知力を尽す。黒もじに恐れを抱いたのは掲句に出会ってからである。

師は脇役の黒もじに意をそそぎ、心をよせ、その背後にある無常をうたった。へ黒もじに切先ありへ私の生涯の公案とも言える一句となった。

諸岡孝子

主宰の句

西ヶ原日記 (七)

鈴木榮子

手作りのくぎ煮あと引く新茶どき
商店街三つ連ねて桜まつり
管理費なき自家保有なりかたつむり

愛車とて自転車二台花見地区

「オレオレ」といふ人は知らず電波の日

牡丹の芽ときどき嚙みて養命酒

料理もファッション焼梅干を朝一つ

土用鰻まことに店のうなぎ床

香水の好む隠れ処耳の裏

八十八夜小田原向きて礼をなす(悼)

桜 東 風

浅野 洋子

まんさくの花へまつすぐ朝日影
雨聴くやほろほろ苦き菜花粥
総知らぬ子に総の春供へけり
見て飽かぬ女雛男雛や一と日添ふ
たんぽぽや或る日は羨し親子連れ
日月や都忘れの濃紫
諸葛菜幼馴染に似て親し
鄙住みや髪にしたたる春の月
彼岸会や二兎失へる母として
誰も居ぬ児童公園初桜

暮 春 抄

近藤 牧男

摘草やところどころの水溜り
春風のくすぐつてゐるぼんのかぼ
水底の手にとるやうに春日影
松の芯池にも磯のありにけり
春まつり舞台の上を掃いてをり
葛ざくらしんみりさせてしまひけり
春月や山手線に終点なし
またもとのさくらに戻る遊歩道
友達の友達そして花見酒
駅前通りそぞろ夜店を流しけり

当月集

鈴木 榮子選



○ 市川 玲子

禅林の空を覆ひし辛夷かな

春深し一刀彫の観世音

建替やこの老梅だけは残したし

春愁やかへらざる日の旅鞆

ストリートマジックに凝らす瞳や万愚節

○ 上野 進

紅梅のときに火の粉のごとく散る

風車ひとつ機嫌をそこなへり

遁れたき意志を束ねて風船売り

お玉杓子の輪唱酣ビンの中

言霊の幸ふ国のさくらかな

○ 白神 知恵子

電子辞書もちて異国の青き踏む

裂けやすき地図やプラハの春寒し

吾も踏みしドナウへ注ぐ雪解水

残雪の古城へかざす貴腐ワイン

春昼やマリオネットを起し買ふ

○ 荻野 嘉代子

春日さす「め」の字の絵馬を眩しめり

葉壺より放たれし蝶寺門越ゆ

落椿踏むまじ室生鐘坂

彼岸参り新しき供華すでにあり

損斐川や傘雨の句碑も焼蛤も

春燈の句

鈴木 榮子選

乗り替への利かぬ八十路へ春隣

山梨 古屋 喜水

交差するレール春夕焼の中

植木師の鋏が誘ふ春の兆

仰ぎ見る空の群青花吹雪

花咲くや裏山いつも曇りぐせ

別のこと考へてゐる春灯下

花咲いて息吹き返す過疎の里

梅白し母へ宛てたる学徒の書

東京 宮沢 治子

ゴスベルを聴く亡き妻と春の闇

神奈川 金子 輝

啓蟄や五重の塔に地下一階

春ほこりうしろの正面みな去りぬ

露の蔓忍者の里の隠れ径(奈良二句)

疎開児のモンペ擦り切れ卒業す

横断歩道を渡りゆく鹿万愚節

野火猛る「撃ちてし止まむ」と言ふことも

よく喋る子と立話日脚伸ぶ

栃木 内野 俊子

菜の花や富士借景の国に住み

静岡 徳永 辰雄

水仙花大平洋へなだれ咲き

青き踏む蹠勢ふや身の奢り

水仙のざわめき起すローカル詠

さあれ世は運否天賦の臍かな

詠み疲れ疲れても詠む黄水仙

うたかたの身に恩愛の彼岸西風

夜べの雨花のほぐるる音らしき

東京 佐藤 玲子

春塵や余白の多き時刻表

千葉 太田佳代子

花一分人出十二分花の山



余言

鈴木 榮子

春風や十のポケットある上着

佐渡谷秀一

女性の洋服はポケットが少ないので切符などハンドバッグに仕舞うと、さて見付からない。男性の服装は機能的なことをデザインに取り入れているので、スタイルと共にスツキリと纏めてある。思わぬところに粋な隠しポケットがあると、ほーと驚き感心する。十ヶは思い浮かばなかったが、上衣見返しの切符入れ、両脇裾ポケット、内ポケットとペンシル入れ、等々八ヶ位は考えられたが、あとは思いつかない。ポケットがまだあるとして何を入れるのだろう。スキーのウインドヤツケ等、袖にリフト券を入れるチャックポケットが縦に小さく付いていて喜んだものだ。

女性の服でも制服となると必要なポケットはついていて、面白い句である。

水やがて湯となる蛇口万愚節

宮地れい子

混合栓という蛇口、といつてしまえばそれでよいのだが、もともと水道の冷たい水が温水器を通つて温められ、それが調整弁で快適にシンクの蛇口に出てくる。水量温度は使い手が自由に選べる。それを作者の機知で「水やがて湯となる蛇口――」としてそれを少しちゃかして万愚節を持つて来た訳だ。

万愚節は粋に使わないと全く取つてつけたようで、作者の満足に終つてしまいがちだがこれはまことにおかしい。久し振りに万愚節らしい句に逢えてたまされ甲斐があつた。

通れたき意志を束ねて風船売り

上野 進

もの日やイベントでは風船が大きな人寄せの華やかさを演出する。その風船はちよつと油断すると空に飛んでいつてしまふ。風船が舞い上るのを空に遁れたい自由の意志と捉えたところにこの句のおもしろさがある。遁がれたいのは子供も大人も世の常である。捉えるから逃げたい。その上団体で遁れようとしている風船の意志を、風船売りが逃さじと格闘しているのは絵本の一頁のようでユーモア見立てである。